

JaCMESの来し方と今後

黒木英充 くるき ひでみつ / AA研、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（併任）

中東のなかでも特に波乱万丈のレバノン。

首都ベイルート中心部にあるAA研の海外研究拠点

JaCMES (Japan Center for Middle Eastern Studies) は、その激動を目の当たりにしてきた。



2006年2月、開所式。右から村上徳光大使、ターレク・ミトリ文化相、池端雪浦東大学長。



◆設立の由来

JaCMESは現在16歳である。2005年4月6日、ベイルート中心部に事務所を借りた時を誕生日としている。翌年2月1日、JaCMES隣のプレスセンターにて開催の開所式にはレバノンの文化大臣も臨席、100人以上がレセプションパーティーに参加した。

しばしば「激動の中東」という言葉が使われるが、レバノンもそれを体現する。この海外拠点設置は、2005～09年度に文科省から東外大AA研に措置された特別教育研究経費「中東イスラーム研究教育プロジェクト」によっているが、その予算措置の背景には、2003年のイラク戦争を当時の日本政府（小泉純一郎首相）が「支持」したことへの穴埋めとして、中東との文化交流活性化を求める機運があった。2005年12月のレバノン政府閣議の承認により、議会議事堂や首相府から徒歩数分の場所にJaCMESを公式に設置できたが、それは日本の文科省と外務省の後押しを得た現地の日本国大使館が、レバノン政府との間を仲介してくれたことが大きい。

そもそも日本の県規模の小国になぜ拠点を設け

たのか。その理由は、第1に1975～90年の内戦後、急速な復興を遂げるなかで、ベイルートが中東の学術・文化・教育の一大中心地の姿を取り戻し、言論の自由を維持していたこと、第2にレバノンがイスラームとキリスト教の多様な宗派（公認宗派はユダヤ教も含め18）が勢ぞろいし、中東の諸問題を凝縮すると同時にプリズムのように分光して見せてくれる国であること、であった。中東の動向を観察し、現地研究者と交流するうえで格好の場なのだ。

◆レバノンの波乱万丈

ただ「激動」は誕生前に始まっていた。事務所選定を終えた2005年2月、ラフィーク・ハリリー元首相がベイルート中心部で爆殺される。JaCMESのすぐ脇にある「殉教者広場」（オスマン帝国末期の弾圧に抗して落命した人々を記念する国家の中心的広場）は、巨大なデモ会場となり、内戦後駐留を続けていたシリア軍は撤退。開所式から半年もたたぬうちに、今度はイスラエルが1か月間にわたりレバノンの南半分を猛爆撃した（2006年7～8月）。2007年11月の大統領の任



2015年3月、内戦下シリアの文化財保護のための会議（奈良県立縄原考古学研究所主催）。前列中央にシリアとレバノンの考古総局長。



2010年10月、ベイルートの中心、星の広場。

*写真はすべて筆者および関係者撮影。



2008年10月、キプロスの研究者を招いての講演会。

期切れに際しては後任が決まらず、以後半年間は空位。2008年5月のヒズブッラーとスンニー派民兵の間の市街戦を経て、ようやく後任が決まった。

2011年、隣国シリアで内戦が始まると、レバノンは体制派・反体制派双方の窓口となる一方、100万の難民が流れ込んで人口が2割も増加した。国軍兵士がシリアから侵入したジハード主義民兵に人質を取られるなどしたが、ヒズブッラーが国境の安全を確保した。ただこの間、ベイルート市内は概ね平穏であった。

しかし政府の機能不全とレバノン国民間の格差拡大は極限に達していた。2019年10月、メッセージアプリWhatsApp使用への課税発表を発火点とする大規模デモが始まり、JaCMESの目の前の通りも殉教者広場と一体化して人々で埋め尽くされた。レバノンの政治システムを支える宗派体制の根本的変革を主張する人々は「革命」(サウラ)を叫び、治安部隊と衝突した。またアメリカの対イラン締め付けの一環でレバノンのシーア派系銀行の一つが潰れた頃からドル資金の一斉逃避が始まり、レバノンボンドの対ドル固定相場は崩壊、10分の1以下に暴落した。預金引き出しも制限され、人々は塗炭の苦しみを味わう。そこに追い打ちをかけたのがCOVID-19であり、2020年8月の港湾大爆発であった。JaCMESも大きな被害を受けたが、すぐに復旧した。

◆さらなる活動へ

これまでにJaCMESでは国際共同研究プロジェクト4件が実施された。13回に及ぶ若手研究者報告会には日本の若手のべ68名を派遣し、レバノンのほかトルコ、UAE、ドイツ、イギリス等から同数のコメンテータを招聘し、貴重な討論の機会を提供してきた。研修会議、講演会、ラウンドテーブル、映画上映・講演会等を開催し、日本におけるイスラームや原発問題、パレスチナ問題、シリア内戦などについてレバノンの人々と共に議論してきた。

またJaCMES特任研究員として、小副川琢

2018年12月、若手研究者報告会の後、バイトエッディーン宮殿の史跡見学。報告者、トルコから招聘のコメンテータ、スタッフ。

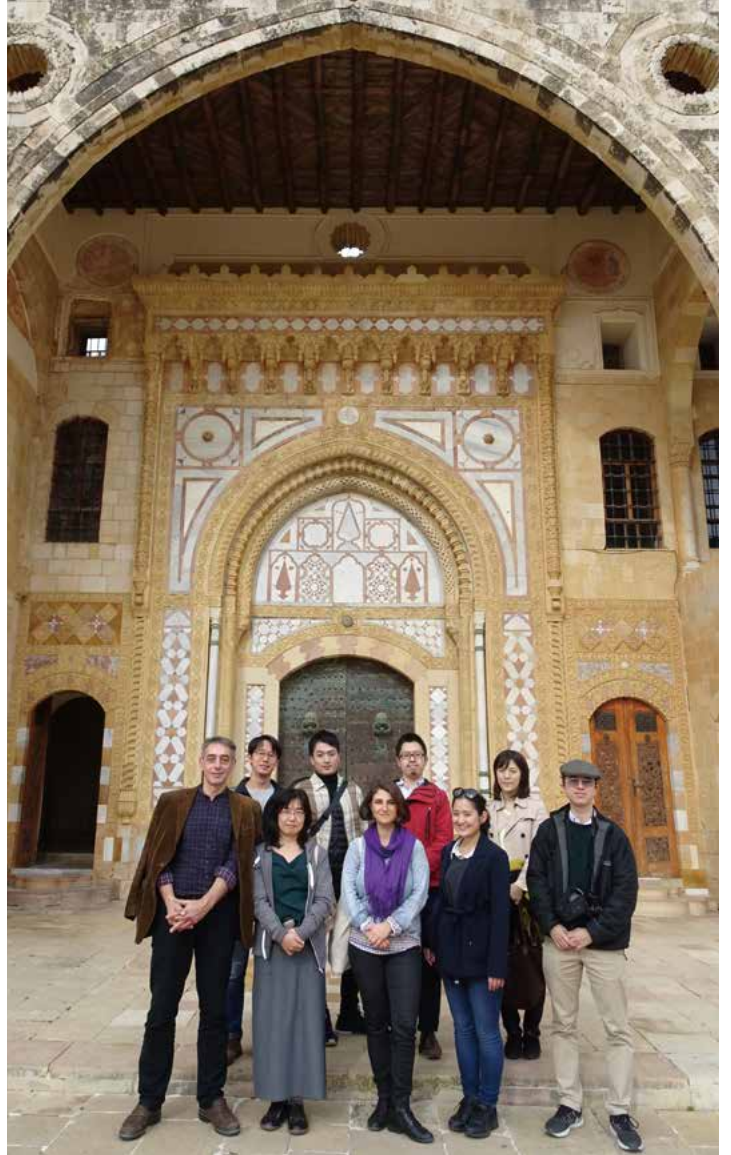
2008年2月、講演会「日本のイスラーム」開催時のグランド・ムフティー訪問。左から桜井啓子氏、白杵陽氏、グランド・ムフティーのカッバーニー師、筆者。



(2010～13年)、近藤洋平(2015～18年)、篠田知暁(2019年～現在)の各氏が活躍してきた(篠田氏はCOVID-19下の空港閉鎖等により、1年余り国内待機したが2021年9月に復帰)。

アジア・アフリカをつなぐ場所に位置し、自国を上回る在外移民人口(子孫を含む)をもち、世界全体とつながるとともに国際問題の集中するレバノン。そこに拠点置いて活動を続けることで、地球社会の変動をつぶさに感じ取り、その意味を発信する研究力が養われる。これから「大人」となるJaCMESが果たすべき役割は増すばかりである。

*肩書きはすべて当時のもの。



2019年11月、「革命」運動中の殉教者広場での1シーン。中央奥がJaCMESの入居するアザリーエ・ビル。



2020年8月、大爆発翌日のJaCMES。窓ガラスはすべて吹き飛んだ。現在は機材も一新し、完全復旧している。